

空海『風信帖』卷子装における尺牘三通（「風信帖」「忽披帖」「忽恵帖」）の配置順番についての考察

遠藤 昌弘*

Consideration on the arrangement order of the Three letters ("Fūshin-jo", "Koppi-jo" and "Kokkei-jo") in Letters known as "Fūshin-jo" arranged in a scroll style.

Masahiro ENDO*

Abstract

This paper relates to the arrangement order of the Three letters ("Fūshin-jo", "Koppi-jo" and "Kokkei-jo") in Letters known as "Fūshin-jo" arranged in a scroll style. The arrangement order was originally in the order of the date of the letter and was modified to the current arrangement order at some point in the past. In this paper, the reason of the modification was considered through actually reviewing the scroll of "Fūshin-jo". In the past, there has nothing to mention about the modification of the arrangement order of the Three letters, it was pointed out for the first time in this paper.

―目次―

前言

- 1、空海『風信帖』の概要
- 2、今日見ることのできる空海の書
- 3、増田孝氏の新説―「忽披帖」「忽恵帖」は写しである―

- 4、空海『風信帖』を実見しての新たな発見
- 5、現在の尺牘三通（「風信帖」「忽披帖」「忽恵帖」）の位置順番は、取り換えられたものである

結語

*

前言

空海は、弘法大師と尊称され、またお大師様と親しまれて日本各所において人々の信仰の最上ともいえる存在であり、その書もまた在世当時より千年以上を経た今日に至るまでわが国を代表する存在である。とくに書の存在は、わが国に留まらず、書の発祥となった中国においても日本の書を代表すると評されるものである。空海の書跡のなかでも三通の尺牘（『風信帖』『忽披帖』『忽恵帖』）を集めた『風信帖』（図B）は、天台宗の開祖である最澄との交流における何よりの証であり、その書は至宝というべきものであり国宝に指定されるものである。

小稿では、近年発表された増田孝氏の新説——「忽披帖」「忽恵帖」は写しである——を出発点としたものである。第一章では、空海『風信帖』の概要について略述した。第二章では、今日見ることのできる空海の書について略述した。第三章では、増田孝氏の新説——「忽披帖」（図I）——「忽恵帖」（図J）——は写しである——についてその要旨をまとめた。第四章では、稿者（遠藤）の空海『風信帖』を実見しての新たな発見について詳述した。第五章では、現在の尺牘三通（『風信帖』『忽披帖』『忽恵帖』）の位置順番は、のちに取り換えられたものであるという考察について詳述した。

本稿の初出は、稿者（遠藤）が書道研究玄筆会（埼玉県川越市新宿町）発行の『玄筆』誌に連載した「書美探訪」第百十七回（第二二五号 2014）から第百二十回（第二二八号 2015）まで、空海『風信帖』と題して執筆した小論である。これに加筆修正を加えて、新たに書き起こしたものである。

1、空海『風信帖』の概要

1・1、空海『風信帖』について——『風信帖』は、昭和二十六年六月九日、国宝に指定された。わが国のおおくの書跡のなかでも、空海『風信帖』ほど、群を抜いてその尊崇を集めるものはないであろう。『風信帖』は、空海（774—835）が、比叡山の最澄（767—822）にあてた尺牘三通を合装した卷子（28.8cm×157.9cm）である。ふつう一巻の全体をさして『風信帖』としているが、くわしくは第一通を「風信帖」（図A）、第二通を「忽披帖」、第三通を「忽恵帖」とよんで区別している。

小稿では卷子名称と尺牘名称が同一であることから、混乱を避けるために必要に応じて、卷子全体は「卷子装『風信帖』」とよび、第一通尺牘は「尺牘『風信帖』」とよぶことにする。

第一通の書き出しが「風信雲書。自天翔臨……」ではじまることから、いつのころとは判じがたいが、ふるくから『風信帖』とよばれている。

尺牘三通の末尾に添えられた付け紙の奥書によれば、もとは五通あったことが書かれているが、このうち一通は盗難にあい、また一通は天正年間（1573—1592）に、ときの関白であった豊臣秀次（1568—1595）の所望により進上したことが記されている。

『風信帖』の伝来についての詳しい内容は不明である。はじめ最澄が開いた天台宗の総本山である延暦寺におかれたとされ、のち文和四年（1355）東寺とよばれて親しまれている京都の真言宗総本山、教王護国寺御影堂（大師堂）へ奉納されたという。現在、昭和三十八

年（1963）に完成した宝物館に秘蔵され今日に至っている。

1・2、『風信帖』の内容について― 空海は真言宗の開祖であり、のちに醍醐天皇より弘法大師を諡号（921）された人物である。また、最澄は天台宗の開祖であり、のちに清和天皇より伝教大師を諡号（866）された人物である。南都（奈良）仏教に変わって新しい仏教が切望された平安時代、遣唐使とともに中国に渡った空海と最澄の交流は、最澄が空海に密教の教えを受けることから始まったという。両者の間で親密な交流をしめす資料が残されているなかで、もっとも有名なものが空海から最澄に宛てられた尺牘を集めて合装されて卷子となったものが、今見る『風信帖』の姿である。

尺牘の文面には、密典（書物『摩訶止観』）の貸与にたいする御礼に始まり、空海の仏教への篤実な心情が漢文体によって記されている。字句に託された空海の言葉には、新仏教の流れが中国から日本にもたらされた高揚と気概を読み取ることができ、現代人が読んでも千年の時空を感じさせることのない空海が満身に体した密教への思いを感得せしめるものである。

1・3、『風信帖』の書について― 『風信帖』にかかれた空海の筆跡は、書聖と称された王羲之の筆法にもとづきながら独自の書風を形成し、空海为天賦の才をいかなく發揮した真跡である。とくに真言密教においては書そのものが生命をもち、人格をそなえたものと指摘する宗教者もいる。また『風信帖』にかかれた書は、筆跡としての美

とともに空海の生命そのものと考えられ、また密教の教えである宇宙真理が具体的に表現されているという指摘もある。この指摘が学問として検証されるかという点は小稿では追求しないが、古来より書は人なり^①の言葉を否定するものではあるまい。まさに空海『風信帖』も同様であることは、言を俟たないであろう。

『風信帖』における文章表現の巧妙は言うまでもなく、その書は小字でありながらも中国の名跡に比肩する筆跡である。稿者（遠藤）の管見ながら、この指摘に対して否定する説論を見たことがないことは、なにより証左といえよう。その書は博大な氣象による運筆にくわえ、空海が精神が書かれた文字の一点一画に宿るともいっても過言ではないほどの深い精神性を看取することができる。

1・4、空海の略歴について― 宝龜五年（774）、讃岐国多度郡（いまの香川県善通寺市）に生まれ、幼名を佐伯真魚^{さへきのまお}という。

二十四歳で出家し諸国を遍歴して修行を積んで、三十一歳のとき遣唐使船にて入唐を果たした。長安の青龍寺の僧・恵果から密教の秘法を授けられ真言密教の奥義を究め、二年後に帰朝し高野山に金剛峯寺を建て真言宗を開いた。

空海は仏教だけでなく、書にも精通し篆書・隸書・楷書・行書・草書の五体のほか飛白書をよくした。その真跡には『風信帖』のほか、『聲誓指帰（図C）』『灌頂歴名（図G）』『七祖像賛（図H）』『金剛般若経開題』などがある。わが国においては、嵯峨天皇（786―842）・橘逸勢（？―842）とともに三筆のひとりに挙げられ、また入木道（書

道のこと）の祖と仰がれている。承和二年（835）三月二十一日、享年六十二歳にて入滅した。

2、今日見ることのできる空海の書

2・1、今日見ることのできる空海の書―空海六十二歳の生涯で、今日見ることのできる伝来書を除いた空海の真跡は少数である。若年期のもっとも早いものは『聾瞽指帰』（797）で、空海二十四歳の書である。十年ほどを隔てて三十三歳のときの『三十帖策子』（805頃 図D・E・F）がある。つぎが七年後の『灌頂記』（812―813）で、三十八歳から三十九歳にかけてのものである。『風信帖』（812頃）も断定はできないが同時期のものと考えられている。また同時期には『金剛般若経開題』（813）がある。このほか『七祖像賛』（805―821）があつて、三十三歳から四十八歳のものである。このほか『大日経開題』があるが、年代ははっきりしない。

また空海の筆と伝えられるものに『将来目錄』（806）『急就章』（812）『文筆眼心抄』（820）『益田池碑銘』（825）があり、年代は不詳であるが『崔子玉座右銘』『孫過庭書譜』『新撰類林抄』がある。これらは空海と縁のふかいものだが、空海の真跡とは考えられないものである。

空海の生涯でもっとも転機となったのは、延暦二十三年（804）に遣唐使船で入唐し都の長安で密教の奥義をきわめ、多数の貴重な典籍をたずさえて大同元年（806）に帰朝したことであろう。さきにあげた書例でいうと『聾瞽指帰』は、入唐以前では唯一のものである。

『三十帖冊子』は、唐において書かれたものである。『灌頂記』『風信帖』『金剛般若経開題』『七祖像賛』は、帰朝後の三十八歳から四十八歳のものである。これより六十二歳で入滅するまで、書写年の確認できる真跡は残されていない。

2・2、『聾瞽指帰』について―空海の著作として知られる『三教指帰』の草稿となったものが、『聾瞽指帰』である。三教とは、儒教・仏教・道教をいう。『聾瞽指帰』では、三教の優劣を論じてのち、仏教の妙理を説いている。文章は駢儷体（べんれいたい）をもちいて散文というよりも韻文にちかいもので、音調をそろえた文章にして形式をととのえたものである。空海が、中国の文学にも精通していたことが理解できる。文字は点画に筆力がみなぎり、その字姿は王羲之書法をよく習得したものである。筆法上の特徴的なところは、全体をとおして収筆にトメがおおくハライが少ないことが挙げられる。書体は行書でありながら、一文字ずつ書きすすめていくという楷書的な運筆であるといえる。

2・3、『三十帖策子』について―策子は、冊子とおなじ意味である。三十帖の策子で構成されていることから、名づけられている。内容は、金剛界（こんどうかい）と胎藏界（たいざうかい）の経論・儀軌・梵字（ぼんじ）真言（しんごん）で、真言宗の根本宝典とされるものである。三十帖の大部分は滞在した長安の写経生によるものとされるが、そのうちの一部が空海の自筆と確認されている。第二十帖（図D）は厳正な写経体の楷書でかかれていて、空海の楷書の真相を見ることができる。第二十六帖（図E）は細字でありながらも、

たつぷりとした草書で、とくに破や縁などは文字が左に傾斜しながら中心を右に移動させていて、王羲之の草書の特徴をよく学んでいることが指摘できる。第二十七帖(図F)には、古代インド語で用いられた文字である梵字(悉曇文字)もかかっている。

2・4、『灌頂記』について—『灌頂記』は、空海が高尾山寺(のちの神護寺)における灌頂と呼ばれる儀式の記録である。このときの灌頂は結縁灌頂というもので、どの仏に守り本尊となってもらうかを決める儀式であった。目隠しをして曼荼羅のうえに華をなげ、華のおちたところの仏と縁をむすぶところから結縁灌頂とよばれている。弘仁三年(812)の十一月十五日と十二月十四日の灌頂には、最澄が参加した。十一月の金剛界灌頂では最澄の守り本尊是因菩薩となり、十二月の胎藏界灌頂では宝幢仏となった。

2・5、『七祖像賛』について—七祖とは真言宗の七人の祖師で、龍猛・龍智・金剛智・不空金剛・善無畏・一行・恵果をさす。祖像には、当時の中国で流行していた飛白書を見ることができる。空海が、書つまり筆跡にたいして密教の霊力をこめたものであろう。空海にとって、密教とその教えがかかれる文字つまり書は一体であったといえる。

3、増田孝氏の新説—「忽披帖」「忽恵帖」は写しである—

3・1、増田孝氏の新説、「忽披帖」「忽恵帖」は写しである— 増田

孝氏は、その著『書の真贋を推理する』(東京堂出版(2004))において、『風信帖』三通のうち第一通「風信帖」のみが空海の真跡であり、第二通「忽披帖」と第三通「忽恵帖」は写しであることを主張した。昭和二十六年六月に国宝に指定された『弘法大師筆尺牘三通(風信帖)』は空海の真跡として誰も疑いを呈した者のなかったもので、まさに宗教界はもとより書道界にとって驚天動地というべき言説である。

増田氏は、東京教育大学(いまの筑波大学)卒業のち高校教諭をへて愛知文教大学教授となり、副学長・学長を務めている。研究分野は日本書跡史・日本文化史で、著作には『光悦の手紙』『茶人の書』『日本近世書跡成立史の研究』などがある。

3・2、増田氏の推理—『風信帖』については、『書の真贋を推理する』第二章に「風信帖を推理する」というテーマで論じられている。この表題にあるとおり、あくまでも「推理」として文章は進められている。こうした前提から文中には、「料紙の年代測定がされているわけではない」や「料紙の科学分析が待ち望まれる」などの言葉が述べられている。これは国宝指定という壁があつて原典調査が行われていない現況を示しているが、増田氏が、こうして自身の見解を出版によって公表したことは、かなりの確信を得ているものであり憶測や想像ではないと考えて差し支えあるまい。

3・3、増田氏の主張— 増田氏の論述は、①原物の魅力、②風信帖とは何か、③奥書および付属文書、④書風は二種類、⑤「忽披帖」

と「忽恵帖」の書風、⑥料紙の観察、⑦不思議な印、⑧風信帖の成立過程の順で進められている。小稿では論説のすべては紹介できないため、その要旨を確認する。

①原物の魅力から③奥書および付属文書までは、『風信帖』全体の紹介である。いわば、のちの論述のための前提であり『風信帖』の概略である。

④書風は二種類から見解が述べられている。『風信帖』三通のうち、『風信帖』(A)と「忽披帖」(B)「忽恵帖」(B')とし、おおきくはA類とB類の二種の書き手が存在すること指摘する。そしてB類の(B)と(B')は別筆であるとし、(B)と(B')は微妙な違いがあるとするとその理由としたのが、筆脈の自然さを判断の基準としている。増田氏は「風信帖」だけが書の筆跡として自然であり、「忽披帖」「忽恵帖」には、その自然さが欠けている点を挙げている。「忽披帖」「忽恵帖」について……いずれも一字一字がポツポツとしており、筆を執る者の気持ちの流れをそこから汲み取ることができない……と述べている。

⑤「忽披帖」と「忽恵帖」の書風では、「忽披帖」と「忽恵帖」にある字例をあげて詳細に分析している。「忽披帖」では枉書・法儀・披・過・不具・釈遍照をあげて、自然な勢いの感じられない力の抜けた跳ね方^フひどくぎ^グこちない^イと述べて、これらの理由として見書(見写しのこと)のためであることを理由としている。「忽恵帖」では、三日来也・慰情・参入・意也・願・所望・還・不具をあげている。くわえて「忽披帖」と「忽恵帖」の書風が、空海が活躍したのちの平安中期以後の写本であることも指摘している。

⑥料紙の観察では、書かれている紙が「風信帖」は楮であり、「忽披帖」「忽恵帖」は楮・三桮^{みつまた}・雁皮^{がんび}の混じったものであると目で確認できるとする。ただし、三通とも今日まで料紙素材の科学分析はなされていないことから、決定的な判断とは言えないものである。

⑦不思議な印では、『風信帖』の表面(図K右)と背面(図K左)にある押印や奥書の文字などについて詳細な指摘をくわえている。なお背面にある押印については未公表で、印面の内容は不詳である。

⑧風信帖の成立過程では、現在の『風信帖』三通ができあがるまでを推理している。はじめ空海真跡本「風信帖」と、真跡本「忽披帖」「忽恵帖」は切り離されて単独の紙面のまま伝来したと推理する。のちに真跡本「忽披帖」「忽恵帖」は何らかの理由で写しに替えられて残され、時期は不明であるが、のちに真跡本「風信帖」を冒頭にして現在の巻物に仕立てられたと推理する。

4、空海『風信帖』を実見しての新たな発見

4・1、空海『風信帖』を実見する――広報が不十分であったためか大きな話題として耳にしなかったが、平成二十六年九月十七日から十月十三日まで、東京国立博物館(台東区上野公園)本館・国宝室にて『風信帖』全体が展示された。筆者(遠藤)は、九月二十六日金曜日の夜間開館日(午後八時まで開館)に見学の機会を得た。静謐の気に満ちて展示台におかれた『風信帖』は、ときおり見学者がいるものの混み合うことなく、長閑を過ごして心おきなく観賞する饒幸を得た。この折に図版写真では感じることもできない、いくつかの発見があっ

たので、その報告と私見を以下に述べる。

4・2、『風信帖』の紙について―これは、前章で述べた増田孝氏の指摘である……第一通「風信帖」は楮であり、第二通「忽抜帖」第三通「忽恵帖」は楮・三桎・雁皮の混じったものであると目で確認できる……と同じ感想を得た。稿者（遠藤）の観賞では、第一通「風信帖」は厚手の紙で、表面がザラついた紙質であること、墨はやや淡墨色で松煙墨のように青みがかったことに、さらさらとは筆を運びにくく、どうしても一文字一文字ごとに運筆されているようであること。これに対して第二通「忽抜帖」第三通「忽恵帖」は薄く、また表面が平滑でツルリとしてゐること。さらに第二通「忽抜帖」は、墨は黒色にちかく油煙墨のようであるが、少しニジミやすい紙質であること。また第三通「忽恵帖」は、墨は第二通と同様であるが、ニジミがでにくいもので筆が軽快に運ばれていることが、今回の実見により判明し得た点である。

4・3、付紙つけがみにある奥書について―付紙にある奥書は五条が記され、①「以上五枚」、②「五枚、八尺七寸五分」、③「伝領（花押）」、④「本寄進状、雖為五通、猶本主良瑜之許留置之間、守禪或人、一枚盗取之由、良瑜送二一枚紛失之由、載之者也。既副置状」、⑤「当関白殿下秀次公、以与山上人、為御所望付、消息四枚之内、一枚進上畢。天正廿壬辰年四月九日」とある。五条の奥書の内容を総合して要約すると……もともとは五通あったが、良瑜のもとにあった時に一通は盗

難にあった。さらに一通は天正二十年（1592）豊臣秀次の所望により進上された……と述べている。また付属の寄進状により、文和四年（1355）に教王護国寺（東寺）の所有となったことが記されている。

4・4、押縫印おしほういん「延暦寺印」について―押縫印とは、紙の継ぎ目が分割しないことを目的として押印するものである。『風信帖』では第三通「忽恵帖」の末尾と付紙のあいだに押印（図M）されている。しかし仔細に観察すると、二度押ししている様子（図N）がわかる。一度目は四十五度に傾けて、二度目は、その上から垂直にして、まるで一度目の押印を覆い隠すように押印されている。ここで注目したいのは、一度目の四十五度に傾けた押印左半分は付紙に残っているものの、第三通「忽恵帖」の末尾にはないことである。以上を考えればかならずや、どこかの本紙の末尾に押印右半分の存在を疑わなくてはならない。そこで、よく目を凝らしてみると、第二紙の末尾に、ほんのりとごく薄く右半分と思われる押印跡（図L）を見つけることができた。

5、現在の尺牘三通（「風信帖」「忽抜帖」「忽恵帖」）の位置順番は、取り換えられたものである

5・1、もとの姿の卷子における尺牘三通の位置順番への考察―現在、第一通「風信帖」について第二通「忽抜帖」について第三通「忽恵帖」について付紙という順序で卷子装となっているが、第四章で確認した押印にしたがえば第二通「忽抜帖」と付紙が一体であったことは間

違いないが、第一通と第三通「忽恵帖」の順番が不明である。

そこで一つの仮説として、尺牘に書かれた日付による順番を想定した。第一通「風信帖」は九月十一日・第二通「忽披帖」は九月十三日・第三通「忽恵帖」は九月五日であることから、現状の卷子装以前は「冒頭が「忽恵帖」で、次は「風信帖」、最後が「忽披帖」に付紙があった」というもの(図O)である。

5・2、尺牘三通の位置(順番)が替えられた理由―ではなぜ尺牘「風信帖」を第一通に装幀を直したかといえ、教王護国寺において―尺牘「風信帖」だけは本来のもので、空海の真跡であるとして伝わっていた―このことが第一の理由ではないかと思量される。はからずも、前章の増田氏の「第一通「風信帖」だけが真跡である」という見解を追認することになったわけだが、増田氏の新説にさらに実証を加え得たものと思う。

本来五通あった尺牘(現存の「風信帖」「忽披帖」「忽恵帖」と失われた二通)は、文和四年(1355)に教王護国寺の所蔵となつてからは、空海の筆跡としての尊重のみならず、宗祖空海そのものであり御神体としての存在であったことは、ここで改めて言うには及ばないであろう。こんにち現在でも教王護国寺の御影堂(大師堂)では、毎朝六時に空海が住持し暮らしていた時と同じように一の膳と二の膳、そして茶を供える生身供が行われていることで知られるように、空海尺牘は―空海その人の化身―として大切に護持され宝蔵されていたであろうことは疑うべくもない事実と言つてよい。教王護国寺の僧侶であ

れば、尺牘五通の存在は絶対無二であり不可侵のものであったはずである。しかし一通は盗難にあり、ついで時の権力者である関白豊臣秀次の所望により、さらに一通が進上されるといふ法難というべき経緯が書き残されている。

卷子『風信帖』を護持した教王護国寺の僧侶にとつて、伝来の尺牘のうち―尺牘「風信帖」だけが真筆であつた―ことは口外されない公然の事実として伝えられたと考えることは不自然ではないだろう。当初の卷子装は尺牘の日付順で卷子装とされていたが、そのうち真跡である尺牘「風信帖」を第一の本尊宝物として卷子冒頭に、写本である「忽披帖」「忽恵帖」を継いで整え直したものと考えすることは自然ではないであろう。

5・3、「忽披帖」「忽恵帖」はなぜ順番が変わつたのか―きわめて単純に考えれば、「風信帖」を冒頭にするために、当初冒頭にあつたと考えられる九月五日付「忽恵帖」を切り取つて、第二番目の九月十一日付「風信帖」と第三番目の九月十三日付「忽披帖」はそのままにして末尾に貼りこみ、現状である冒頭を尺牘「風信帖」とし、第二番目に「忽披帖」ついで第三番目に「忽恵帖」―としたというのが、もっとも簡易であり、また原状をできるだけそのままにして変更しやすい方法であつたと考えられる。

結語

本稿の研究の端緒は、東京堂出版『書の真贋を推理する』に収めら

れた増田孝氏の新説―「忽披帖」「忽恵帖」は写しである―に触発されたものである。卷子『風信帖』は古来より伝来して近代にいたるまで、誰も疑うことのなかった空海の真筆とされてきたものである。この故に、それに疑いを差し挟むことは禁忌という、暗黙の了解や配慮があったように感じられる。実際に書作を専業とする書家の評論には、「忽披帖」「忽恵帖」の筆跡に対していぶかる指摘があったことも少なからず目にした。しかし、あくまでも感想であり、直接に批判したものではなく、空海の仏徳を損なうことは憚られたといえる。

かく言う筆者（遠藤）も、卷子『風信帖』三通は格別に目にし手習いし、諳んじ暗ずるほどに観照したが、増田氏の説に触れるまでは、微塵の疑いもなかった。人の書写の状況は様々であり、どんなに名人といえども筆者自身の体調はもとより、晴れか雨か朝か夜か夏か冬かなど時候の条件、筆墨の良否また適否など用具用材の条件など、幾つもの要素が相俟って筆が執られる訳であるから、残された筆跡に多少の瑕疵はあっても当然であるという是認であった。こうした思込みにあって増田氏の新説は衝撃であった。そして、図らずも三度目となる実見によって、こうした筆者（遠藤）の不明を払拭すべき好機となった。

改めて、空海の筆跡の強弱や緩急、かかれた用紙、墨のニジミとカスレ、さらには押印に至るまで検討できたことで、小稿の第五章における―現在の尺牘三通（『風信帖』『忽披帖』『忽恵帖』）の位置順番は、取り換えられたものである―という説を導くことが可能となった。

将来、科学技術の進歩によって、卷子『風信帖』における尺牘三通

それぞれに墨紙の年代測定が行われることを期待したい。これが行われれば増田氏の卓説、また小稿の検討と考察が確認されるであろう。

（平成三十年九月十五日稿）

参考文献

- ・『空海』 金尾文淵堂 1910
- ・『弘法大師真蹟集』 文昌堂書店 1933
- ・『弘法大師真蹟全集』 1 平凡社 1934
- ・『書道全集』 11 平凡社 1955
- ・『空海 風信帖／灌頂歴名／座右銘』 二玄社 1959
- ・『墨美』 91 墨美社 1959
- ・『Museum』 115 東京国立博物館 1960
- ・『書品』 124 東洋書道協会 1962
- ・『墨美』 130 墨美社 1963
- ・『日本書道大系』 2 講談社 1971
- ・『弘法大師真蹟集成』 法蔵館 1973
- ・『墨美』 230 墨美社 1973
- ・『書道藝術』 12 中央公論社 1975
- ・『書の日本史』 2 平凡社 1975
- ・『書と人物』 6 毎日新聞社 1978
- ・『日本書蹟大鑑』 1 講談社 1978
- ・『原色法帖選』 11 二玄社 1985
- ・『中田勇次郎著作集』 5 二玄社 1985

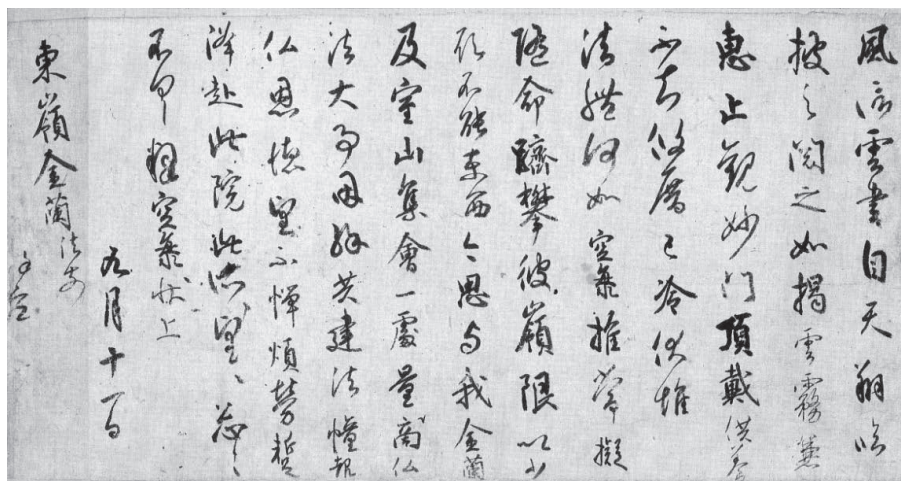
- ・『NHK国宝への旅』 日本放送出版協会 1988
- ・『日本名筆選』 36 二玄社 1995
- ・『空海 風信帖』 書芸文化新社 1999
- ・『弘法大師墨蹟聚集』 弘法大師墨蹟聚集刊行会 2001
- ・『風信帖・灌頂記』 天来書院 2002
- ・『書の真贋を推理する』 東京堂出版 2004
- ・『空海筆「風信帖」の形を読む』 世界書院 2004
- ・『週刊ニッポンの国宝100』 21 小学館 2008
- ・『名僧の書』 淡交社 2012
- ・『日本美術全集』 5 小学館 2014
- ・『墨』 233 芸術新聞社 2015

— 付記 —

空海の人物に関する著書研究論考は枚挙に暇がないことから、ここでは『風信帖』に関するものだけを取り上げるに留めた。

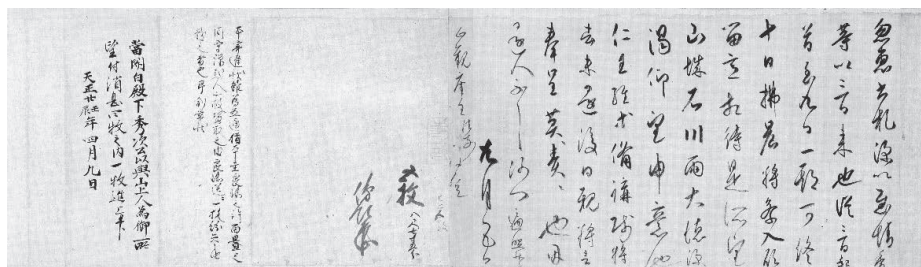
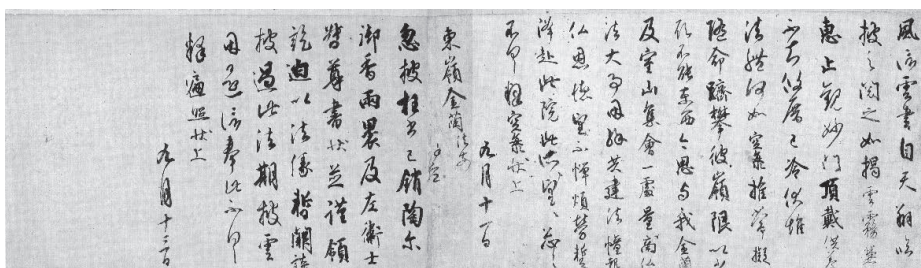
空海『風信帖』のうち第一通「風信帖」

図A

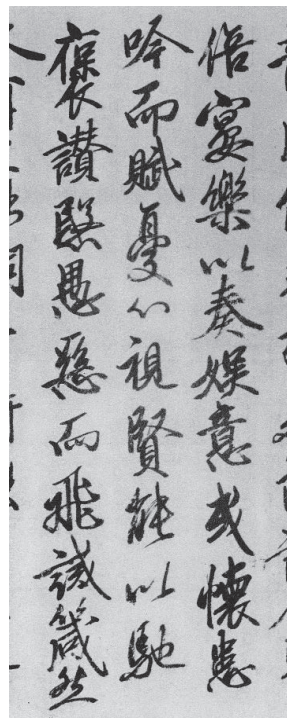


空海『風信帖』卷子全体の現況

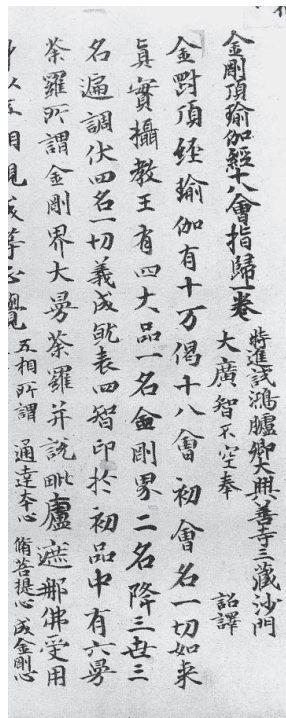
図B



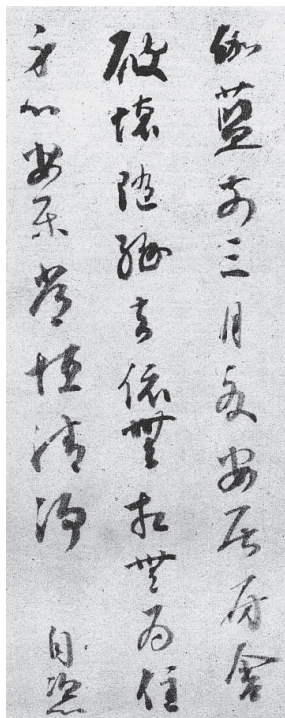
空海『雙臂指掃』(途中部分) 図C



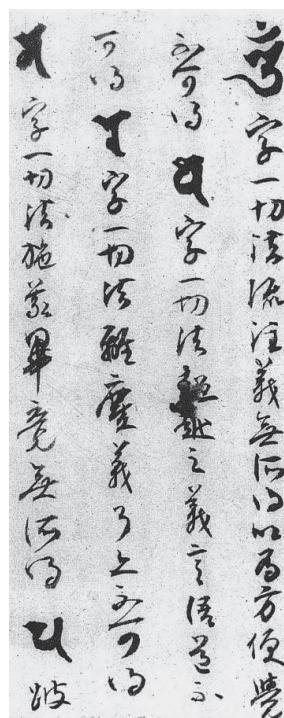
空海『三十帖策子』第二十帖(冒頭部分) 図D



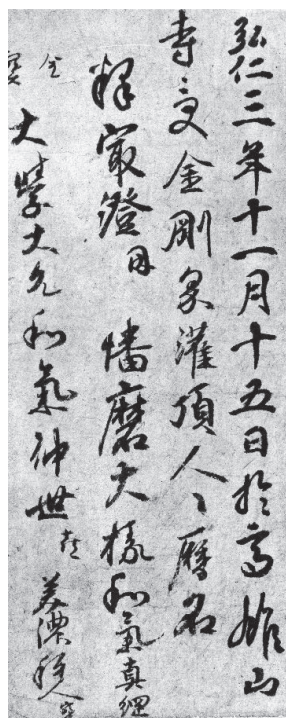
空海『三十帖策子』第二十六帖(途中部分) 図E



空海『三十帖策子』第二十七帖(途中部分) 図F



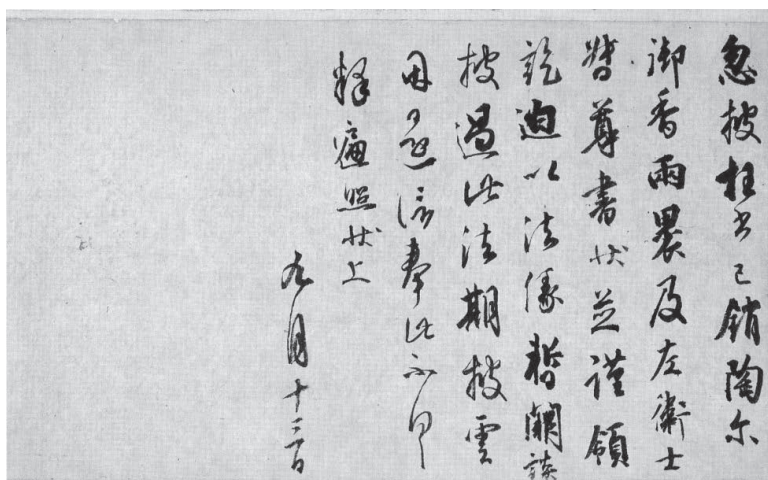
空海『灌頂記』弘仁三年十一月十五日(冒頭部分) 図G



空海『七祖像贊』のうち龍猛像贊(飛白書部分) 図H

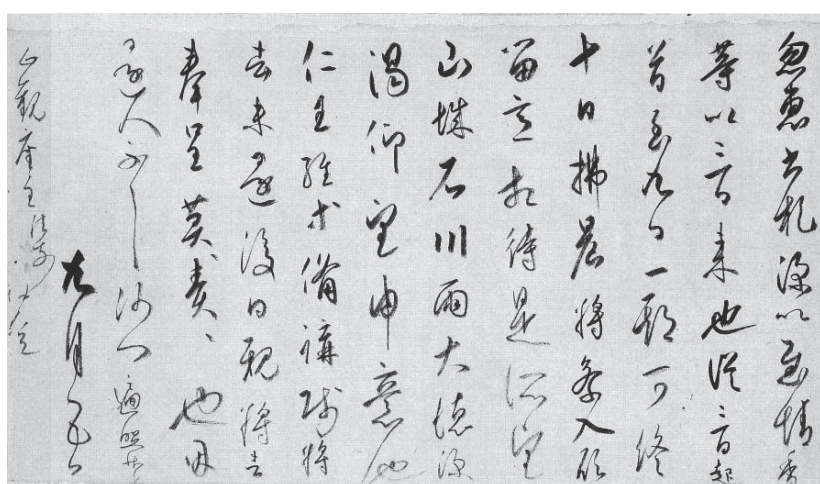


空海『風信帖』のうち第二通「忽披帖」



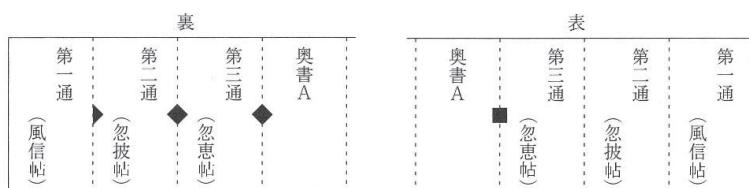
図I

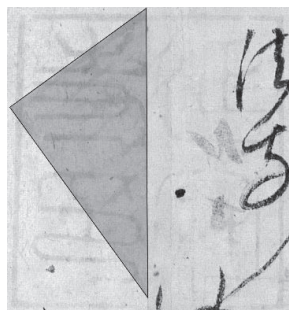
空海『風信帖』のうち第三通「忽惠帖」



図J

『風信帖』の押印
図K

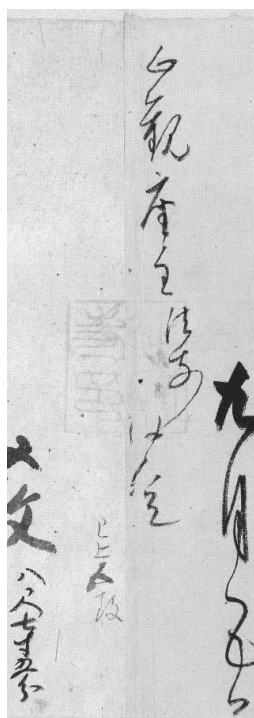




押縫印部分

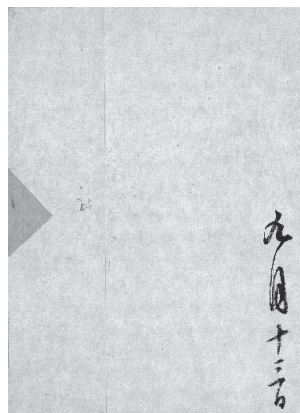
* 黒塗り箇所は、遠藤加筆

図N



第三通「忽恵帖」末尾と付紙にある押縫印の現状

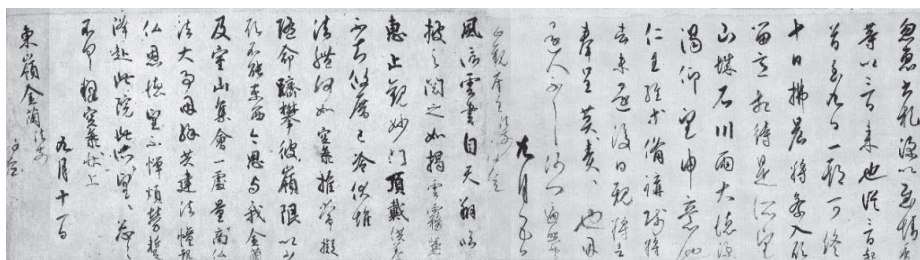
図M



第二通「忽披帖」末尾部分

* 黒塗り箇所は、遠藤加筆

図L



— 遠藤仮説 — 現状『風信帖』 卷子以前の復元 図O

